

■（60）「東日本大震災」の名称に異論、理解

岩手、秋田の両県に配られる朝日新聞の地方版に最近、「東日本大震災」という名称に異論を唱える意見が掲載された。秋田の出版社代表の原稿で、「今や国際語にもなっている『ツナミ』が背後に隠れてしまい、曖昧（あいまい）なまま災害が風化していくのを危惧する」とある。原発事故も含めてほとんどが津波被害の震災で、共感できる論だった。

そもそも地震の呼び名は地震・津波翌日の3月12日、政府が「東北地方太平洋沖地震」と名付けた。それでも、新聞・テレビはそれぞれが適していると考える呼び名で記事を書き続けた。「東日本大震災」のほか「東北関東大震災」「東日本巨大地震」などだった。決着が付いたのは4月1日の政府の閣議で、災害の名称を「東日本大震災」に決めた。

過去の三陸地方を襲った地震に伴う大津波は、明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、昭和チリ地震津波…と名称に「津波」の文字がある。今回の違いは何なのか。

原発事故という新しい、かつ深刻な災害を含んでいるからなのか。冒頭に紹介した代表は言う。歴史の傷も覆い隠してしまう力が言葉は持っている。考えさせられた（山）